

日本葬送文化学会 30 周年シンポジウム 『終活ブームのつぎを本音で考える』 報告



毎日ホールがほぼ満員となる約 160 名が集まった

1985 年から活動を続ける「日本葬送文化学会」の 30 周年記念イベント『終活ブームのつぎを本音で考える』が、5 月 7 日(日)に千代田区毎日新聞社「毎日ホール」で開催された。ゴールデンウィークの最終日という日程であったが、参加者は約 160 名の満員状態で、年配の方が多いのはもちろん、20～30 歳代と思われる方もちらほら見受けられ、関心の高さが伺えた。

コーディネーターは毎日新聞で終活コラム「身じまい練習帳」を連載している滝野隆弘氏。滝野記者の記事を継続的に読んでいるファンの方も多かったようだ。

シンポジストは 3 人。建築家として火葬場の研究や設計に携わってこられた八木澤壮一氏。京都にある正覚寺副住職であり、日経ビジネス記者として『寺院消滅』『無葬社会』の著作がある、鵜飼秀徳氏。日本初のお墓プランナーであり、日本葬送文化学会会長長江曜子氏。

第一部はシンポジストのプレゼンで、火葬の歴史からこれからの葬儀を考える(八木澤)、他死社会と葬送の変化(鵜飼)、デスクアサーサービスとして終活を考える(長江)といった内容。総じて「終活」が「単なる葬送の簡略化」と考えられがちな風潮に対して、ここで一旦立ち止まり「自らが自分の死の担い手になり、生命の大切さを改めて考える」きっかけにし



滝野隆弘氏

長江曜子氏

た方がよいのではないか? といった提案がなされました。

第二部は主に参加者の質問に応えるフリートークで、「直葬」や「墓じまい」といった最近よく耳にするテーマへの疑問が多く聞かれたのは、現代の葬送文化の大きな変化に、参加者の多くが戸惑っているからと思われる。また、「そもそも葬儀の意味とは何か?」という、より本質的な内容へと深く踏み込んだ質問がなされたことも大変印象的であった。(日本葬送文化学会会員：久門 易)

<日本葬送文化学会事務局>

〒103-0027

中央区日本橋 3-2-14 日本橋 KN ビル 4 階

TEL : 03-5201-3364

e-mail : sosobunka@gmail.com